

研究の概要

今を、将来をよりよく生きる子どもを目指した授業づくり
～確かな学びにつながるための評価の在り方に焦点を当てて～

提案者 水野 高明

1 研究目的（紀要pp. 1-7）

今を、将来をよりよく生きる子どもにつながるための確かな学びを実現する授業実践と評価の在り方を明らかにする。

2 研究内容と方法（紀要pp. 8-11）

(1) 研究内容

研究内容 1

指導の根拠と方向性を明確にする。

研究内容 2

子どもの確かな学びを実現するための授業実践と評価の在り方を探る。

研究内容 3

系統的・継続的指導のための評価と情報の生かし方を探る。

(2) 研究方法

研究主題を受け、三つの研究内容に沿って、学部ごとに取組を実施し、授業実践における取組や子どもの変容、教師からの評価によって仮説を検証する。

(3) 研究計画

本研究は、平成19年度～20年度までの2年間の計画とする。

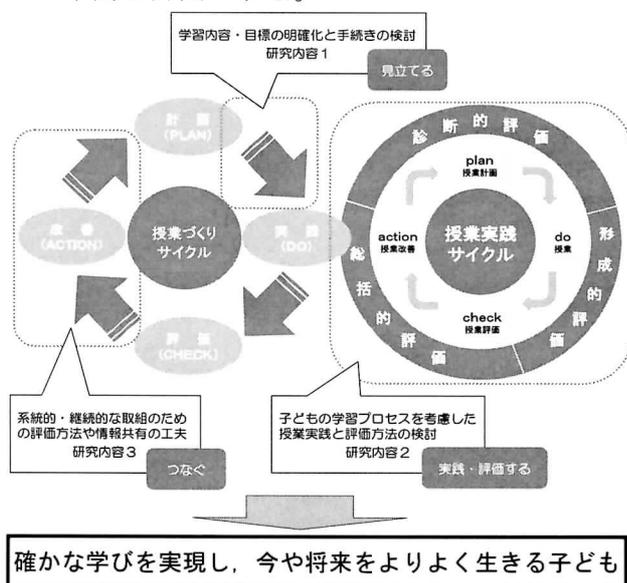


図1 研究構造図

3 研究の実際

【研究内容 1】（紀要pp. 12-13）

実際の授業の計画段階において、教育的ニーズ、子どもの状態像（既習内容、認知特性、発達段階など）を踏まえた目標や学習内容設定の手順と方法を整理し、指導の根拠と方向性を明確にする。

〈個人目標設定までの手続きの整理〉

(1) 子どもの状態像の把握

子どものレディネス、知能、性格、認知スタイルなど、適性処遇交互作用を踏まえて必要な情報収集と子どもの的確な状態像の把握を行う。

(2) 学習課題の分析

子どもの状態像に応じて、学習上での課題を細かく導き出し、教師の指導の意図や方向性をより明確にする。

(3) 目標の明確化

子どもの到達した状態を想定して具体的な目標として明確化する。

(4) 学習内容の構造化と系列化

細かく設定した目標や学習課題の関連を明らかにし、指導の手順や学習内容の時間的配列を検討する。

【研究内容 2】（紀要pp. 14-17）

子どもの確かな学びを実現させるための授業実践と評価の在り方を探る。

〈子どもの学習のプロセスを踏まえた授業実践〉

(1) 確かな学びを支える四つのキーワード

「必然性」とは、学習活動への意欲、自分自身の学習課題への意識や理解など、子どもがその学習へ向かう原動力となるもので、動機付けとも関連する。これを高めることで子どもの学習への向かい方がより促進される。

「思考・操作」とは、子どもが学習課題の解決を図ろうとする際に、既有知識や新たな情報に基づき思考と操作を十分に行うこと。これにより子どもの知的活動を充実させる。

「振り返り」とは、学習課題に取り組み、解決できたか否かという事実とともに、どのような方法が有効（無効）であったかということ子ども自身が振り返ること。自分自身に対する評価を行うことで、学習の効果をより高める。

「実践意欲」とは、学んだことを新たな知識として、次の学習や日常生活など生かせる場面において、子ども自らが課題解決のため主体的に活用しようとする意欲のこと。この意欲を高めることで、習得から活用への移行を促進する。

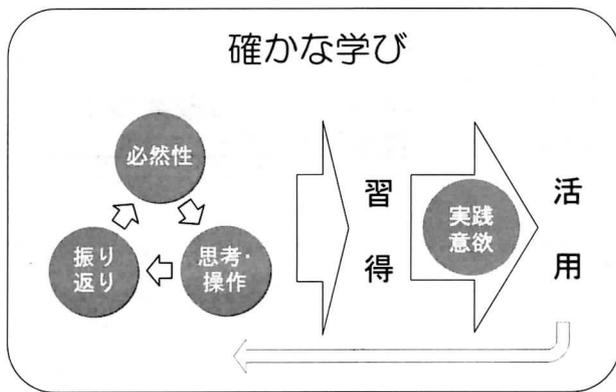


図2 確かな学びを支える四つのキーワード

(2) 四つのキーワードにおける具体的な手立て

学習に対する必然性を高める手立て

子どもが目の前の活動へ興味・関心や意欲を高め、学習活動に向かったり、自分の学習課題を意識したりするための働き掛けを行う。

十分な思考・操作を行うための手立て

可能な限り子どもが学習課題に向かい、自らの力で解決する場面を通して考え方の獲得や解決に導く手順の理解などを目指す。

学習を振り返るための手立て

学習を通して、取り組んだことによる成功や失敗が自分の行動や行為と随伴しているという認知を踏まえた振り返りを行う。

実践意欲を高めるための手立て

学習で得た知識や技能、できるという自信などを子どもが認識し、関連する場面で活用しようとする意欲を高めることを目指す。

<子どもの学びをとらえる評価>

(1) 個人目標に即した評価

個人目標に対して、評価の観点、評価規準（何を評価するか）や評価基準（どれだけ達成したか）を設けて、学習における子どもの変容をよりの確にとらえる。

(2) 授業改善のための形成的評価

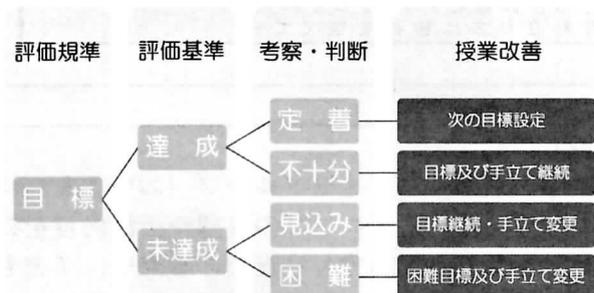


図3 形成的評価による授業改善の手続き

(3) 見取り評価

学習課題への向かい方や解決の仕方など、子どもの学習時の様子について気付いたことを記号や単語で簡潔に書き残し、子どもの言葉や行動の様子から子どもの内面を読み取る。

【研究内容3】（紀要pp. 18-19）

小学部・中学部・高等部の一貫した取組や卒業後の進路先における系統的・継続的な指導及び支援につながるための総括的評価の在り方や引継ぎのための情報の生かし方を探る。

(1) 引継ぎの現状と課題

小・中学部は入学前に、高等部は卒業前に関係者間で事前の引継ぎを実施している。進路先での継続した取組につながる情報の整理や伝え方の検討が必要である。

(2) 前次研究における成果と課題から

「つなぐ内容」、「つなぐ人・つなぐ場」、「つなぐ道具」の視点を踏まえ、情報を受ける側の立場に立った情報の引継ぎと共有の在り方の検討が必要である。

(3) 子どもの目標や学習課題の引継ぎ

子どもの学習に関する具体的な取組及び次の目標や学習課題が見える情報を「つなぐ内容」として検討・整理する。

(4) 総括的評価における情報の整理と伝え方

各学部での具体的な取組や子どもの変容に関する情報を、進路先での指導及び支援に生かすための総括的評価の在り方を考える。

(5) 卒業後の子どもの様子の確認

卒業後の子どもの様子や進路先での取組を確認することで、日々の実践の振り返りと学習指導の改善を行う。

4 まとめ（紀要pp. 111-120）

今回の研究では、子どもの確かな学びのためには、授業づくりサイクルのすべての段階において、評価の視点から授業実践を考えることの大切さを確認することができた。

子どもの状態像の細かな把握が、学習上の課題の分析、指導内容の焦点化や目標設定の手続きの整理につながった。また、子どもの学びに即した教師の手立ての検討によって、子どもの確かな学びや教師の授業実践の向上につながった。更に、子どもの学びに関する情報の整理と伝え方の工夫によって、継続した取組の促進につながった。

今後は、更なる質の高い授業実践の構築に向けて、卒業した子どもの進路先での姿から実践を振り返ることや、12年間を見据えた視点で教育課程や年間指導計画の具体的な課題の整理及び改善策を検討が必要である。